



Title	アメリカ大統領の就任演説（1960年~2021年）における平行法の分析
Author(s)	友繁, 有輝
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020, p. 65-74
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85063
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アメリカ大統領の就任演説 (1960 年~2021 年) における平行法の分析

博士後期課程 3 年 友繁有輝

はじめに

本稿は、1960 年から 2021 年のアメリカ大統領の就任演説 (1 期目) で、反復の中の平行法 (parallelism) によってどのような事態や大統領の思惑が前景化するのか、またその効果について論じることが目的である。1980 年代頃から始まった認知革命以降、認知言語学の理論が取り入れられ、メタファーを中心に米国大統領のレトリック (Charteris-Black 2004, 2005, 2014; Lakoff 2014) について議論されてきた。だが、伝統的レトリックの分析は少ないのも事実である。それゆえ、本稿では反復を、説得のために用いられる技法 (Charteris-Black, 2014; Lakoff, 2006; 佐藤 et al., 2006; 大山, 1956) として、また言葉の問題だけでなく、イデオロギーを含む重要な「言葉の選択」 (Charteris-Black, 2014; Gibbons et al., 2018; Lakoff, 2006) として議論を進める。

手始めとして、平行法の基本的な定義を概観しておこう。Silva Rhetoricae の定義では、“Similarity of structure in a pair or series of related words, phrases, or clauses.”と書かれており、下記のように語・句・節に細分化された例が提示されている。

- (1) a. parallelism of words:
She tried to make her pastry fluffy, sweet, and delicate.
- b. parallelism of phrases:
Singing a song or writing a poem is joyous.
- c. parallelism of clauses:
Perch are inexpensive; cod are cheap; trout are abundant; but salmon are best.

(1a) では、N A, A, and A の並列した構成の中に、“fluffy”、“sweet”、“delicate” という形容詞が 3 回連続で使用されており、(1b) では V-ing a N の構成 (“Singing a song”、“writing a poem”) が繰り返されている。(1c) においては、N V A の節の構造が 3 回続けて用いられている。(1) の例では、前後の文脈がないため、談話の中でどのように機能しているのかを特定することは困難ではあるが、それぞれの構成が書き手の視座を提供していることは確かだろう。

加えて、佐藤 et al. (2006: 55) は、平行法を「言語表現における同じかたち、もしくはパターンの繰り返し。パターンの基本は構文、すなわち文、節、句におけるかたちだが、これに音声や意味の繰り返しを加味されると、かたちは鮮明なものとなる。」と述べている。反復の構成は例えば、演説の中で繰り返される場合、聞き手は相手の反復する言葉の背後にある意図を汲み取る必要がある。この点について、Gibbons et al. (2018) は “Syntactic parallelisms tend to suggest to readers that there is a relationship between the two parallel structures. In this way, readers are coerced into seeking interpretive associations between elements” と述べている。本稿においてもこの立場をとり、大統領の視点を考察することが目的である。なお、本稿ではスピーチライター言葉は大統領の言葉と同一視することは断っておかなくてはならない。

このような観点から、1960 年代から 2000 年代の 1 期目の就任演説を順に分析する。第 1 節では、主な研究手法と AntConc のデータを概観し、大統領に特有のコロケーションを観察する。第 2 節では、第 1 節の議論を土台として、演説全体のテーマと一貫性があるメタファーやその他の関連するレトリックも必要に応じて触れながら、大統領の平行法を考察する。大統領のレトリックは国民を「統一」するために使用されることは言うまでもないが、その概念を伝達する仕方や思考のプロセスは大統領によって異なる。その根本的な原因として、社会的背景が異なることが挙げられるため、レトリックと効果、社会的背景の 3 つの視点を並行して参照できるように付録に表を作成している。

1 研究手法とデータ

研究手法として、全 12 件の演説 (21359 語) を AntConc の n-gram 検索によって頻度の高い語やコロケーションを量的に観察した。その理由として、大統領の就任演説として使用されている反復のレトリックを分析する際に、語の組み合わせが大統領に特有のものかを見極める必要があるからである。繰り返し使われているフレーズであったとしても、慣習的に使われているコロケーションの可能性は大いにある。それゆえ、使用されているコロケーションの特徴を掴み、その上で個別の演説の平行法を分析する手順をとった。具体的には、1) AntConc にて、頻度の高い語 (上位 50 語) を検索し、名詞、動詞、助動詞の中で頻度の高いものを特定。(これにより大統領に共通する語を認定することができる) 2) 2 語以上のコロケーション (上位 10 語) の中で、反復されている語を特定し、どの大統領によって使用されているのかを調べた。(これにより大統領の個別の表現を特定することができる)

表 1 上位 50 語で頻度の高い名詞・動詞・助動詞

名詞	1. America (上位 28 語) 2. nation (上位 30 語) 3. people (上位 34 語)
動詞	1. is (上位 10 語) 2. are (上位 16 語) 3. be (上位 18 語) 4. have (上位 21 語) 5. has (上位 37 語) 6. do (上位 36 語)
助動詞	1. will (上位 12 語) 2. can (上位 27 語) 3. must (上位 38 語)

一番多く使用されているのは定冠詞の “the” (上位 1 語) である。名詞は、“America” (上位 28 語)、“nation” (上位 30 語)、“people” (上位 34 語)、のように、アメリカ国民や政府、世界を意識した語が利用されている。頻度の高い動詞は 順に “is” (上位 10 語)、“are” (上位 16 語)、“be” (上位 18 語)、“have” (上位 21 語)、“has” (上位 37 語)、“do” (上位 36 語) であり、助動詞の使用も上位 50 語に含まれ、“will” (上位 12 語)、“can” (上位 27 語)、“must” (上位 38 語)、が用いられている。ちなみに助動詞は「助動詞+be 動詞」の組み合わせで使用されることが最も多い。大統領の演説はオーディエンスを説得することが主な目的 (Cavari, 2017)であることを勘案すると、話者の確信度が低い “may be” ($n^1=5$) や “could be” ($n=1$) の頻度が比較的少ない事実にもうなずける。断定的な “is” ($n=12$) や “are” ($n=12$) が用いられることや、助動詞の “will” ($n=12$) や “must” ($n=12$) が他の助動詞と比較して多く使用されることも自然であろう。2 語のコロケーション (“of the”、“we will”、“of our”、“in the”、“and the”、“the world”、“to the”、“we are”、“we have”、“we are”) においては、上位 10 語の表現は平均すると 9 人に用いられている。

ところが、3 語以上になると全員に共通するコロケーションはもはや存在しなくなる。3 語のコロケーションで最も共通する表現は、“of the world”、“or our nation”、“the American people” であり、多くとも約 64% ($n=7$) の使用である。頻度は全体で 8 回しか観察されない “the American people” は約 64%の大統領が使っているが、一人が使う頻度は “of the world” や “of our nation” と比較すると低いことから、慣例的な使用であることを示唆している。換言すると、あるコロケーションの頻度が高いからといって必ずしも多くの大統領が共通して使用しているとは限らない、ということである。

加えて、一人の大統領がある表現を一人で反復する用法は 3 語のコロケーションまでは多くはないが、4 語以上になるとその使用率が目立ち始める。例えば、4 語のコロケーション “we will make

¹ n は大統領の使用人数を指している。

America”(ドナルド・トランプ (計 5 回))、“America at its best”(ジョージ・W・ブッシュ (計 4 回))、“because of what we”(リンドン・ジョンソン (計 4 回))、“my whole soul is”(ジョー・バイデン (計 3 回)) の 4 人の使用が挙げられる。これらの語の組み合わせは、それぞれの大統領の固有の表現であり、文体的特徴が表出していると予測することは妥当だろう。

興味深いことに、5 語、6 語とコロケーションが増えることで、一人の大統領がある表現を何度も繰り返す割合が増えていく。5 語のコロケーションでは、“we will bring back our”(トランプ (計 4 回))、“a new breeze is blowing”、“new breeze is blowing and”(ジョージ・H・W・ブッシュ (計 3 回))、“again we will make America”(トランプ (計 3 回))、“America at its best is”(ジョージ・W・ブッシュ (計 3 回))、“to renew America we must”(ビル・クリントン (計 3 回))、“the will of the people”(バイデン (計 3 回)) が用いられている。

6 語のコロケーションを見ると、“a new breeze is blowing and”(ジョージ・H・W・ブッシュ (計 3 回))、“the fate that will fall on”(ロナルド・レーガン (計 2 回))、“all are born equal in dignity”(リチャード・M・ニクソン (計 2 回))、“am putting out my hand to”(ジョージ・H・W・ブッシュ (計 2 回))、“are born equal in dignity before”(ニクソン (計 2 回))、“be finished in the first one”(ジョン・F・ケネディ (計 2 回))、“believe in a fate that will”(レーガン (計 2 回))、“by the common objects of their”(バイデン (計 2 回))、“defined by the common objects”(バイデン (計 2 回)) が見つかる。7 語のコロケーションは、“in the whirlwind and directs this storm”(ジョージ・W・ブッシュ (計 2 回))、8 語以上のコロケーションでは、上記の例以外の新規な表現が反復されている例は検出されなかった。各々の表現については、第 2 節にて詳述するが、以上の議論をまとめると次のようになる。

(大統領の就任演説 (1960 年～2021 年) におけるコロケーションの特徴)

- コロケーションの語数が少ないほど慣例的であり、文法的に固定されている。
- AntConc による n-gram の検索では、大統領が同じ表現を 2 回以上反復している表現は、9 語以上のコロケーションでは検出されない。
- 語数が 3 語以上 8 語以下で、かつ頻度が高いフレーズは、一人の大統領が何度も使用している場合が多い。その場合、大統領の個性が観察され、平行法と関係している。

次節から考察する平行法の反復は、大統領特有の表現であるという前提に立ち、次のリサーチ・クエスチョン (RQ) に基づいて年代順に議論を進めるが、演説の中で一貫するメタファーやその他のレトリックについても必要に応じて平行法の効果とともに概観する。(使用されている平行法及び時代背景に関しては付録にまとめている)

(RQ)

- 平行法の使用によってどのような大統領の思惑や事態が前景化され、それによってどのような効果が生み出されているのか。

2 就任演説における平行法の分析

2.1 1960 年代

1961 年のケネディ大統領の演説においては、反共主義の考えが、“those who foolishly sought power by riding the back of the tiger ended up inside”(愚かにも虎にまたがって権力をえようとしたものが、結局虎に食われてしまった (長谷川 訳) という動物のメタファーと戦争のメタファー (“a struggle against the common enemies of man: tyranny, poverty, disease and war itself”) の中に現れている。その対処法として、ケネディは武力に頼るのではなく、交渉の必要性を “Let us never negotiate out of fear. But let us never fear to negotiate” という A (negotiate)・B (fear) を B (fear)・A (negotiate) とする交互配列² (chiasmus) によって強調し、平和主義の思想を顕在化させている。

加えて、ケネディが理想とする世界—「強者は公正であり、弱者は安全であり、平和が保たれる新しい法の世界」(長谷川 訳) —の実現には、時間がかかることは自明だが、追求していく姿勢を平行法によって顕示している。ケネディは、“All this will not be finished in the first one hundred days. Nor will it be finished in the first one thousand days, nor in the life of this Administration, nor even

² A・B を B・A と反覆する技巧 (大山, 1956: 76)。

perhaps in our lifetime on this planet. But let us begin”の中で、“be finished in the first one”を連呼していることに気がつくだろう。「最初の 100 日間」とはケネディ政権の 1 年目、「最初の 1000 日間」とは 4 年の大統領の任期を指し、「我々が生きている間」とは現世代を指していると考えられる。すなわち、小さい単位から大きい単位へと変化させ、徐々に意味を強めているため、漸層法³ (climax) の技巧に分類される。その目標を達成するために、ケネディは国民一人一人が立ち上がることを、“Ask not what your country can do for you. Ask what you can do for your country”という交互配列 (A (country) ・ B (you) を B (you) ・ A (country)) によって情熱的に呼びかけているのである。

続くジョンソンの演説は、「偉大な社会」(Great Society) をキーワードとして提示し、不公平な社会に対して変化を求めている。その姿勢は、変化を武器として見立てるメタファー (“But change has given us new weapons”) に見られ、ジョンソンが想定する正義へとつながる。すなわち、“Justice requires us to remember: when any citizen denies his fellow, saying: ‘His color is not mine or his beliefs are strange and different,’ in that moment he betrays America”の中で示唆されるように、人種差別の撤廃を求めているのである。その意識は、傷と火のメタファーが平行法で使用されている箇所にも看取される。メタファーと平行法の融合は、“So let us reject any among us who seek to reopen old wounds and rekindle old hatreds”の re-V old N の繰り返しに表れ、米国の過去の傷を開く者と憎悪を再びかきたてる者を断固拒否する姿勢を明示している。

ジョンソンが想定する「偉大な社会」とは、“I do not believe that the Great Society is the ordered, changeless, and sterile battalion of the ants. It is the excitement of becoming—always becoming, trying, probing, falling, resting, and trying again—but always trying and always gaining”であり、蟻の規則的な変化のない大群のようなものではないことを示している。すなわち、always V-ing と V-ing の動名詞の反復から判断できるが、その「偉大な社会」を築くためには試行錯誤しながら、状況をより良い方法へ流転させていくことが重要である、というスタンスが貫かれている。

2.2 1970 年代

1970 年代初期のベトナム戦争への反戦運動の勢いが増す中で、ニクソンは演説で「平和」をキーワードに国民に語りかける。建物のメタファー (“we can build a great cathedral of the spirit”) との関連で、戦争や分断の解決策として、精神 (spirit) の重要性を際立たせる。その精神性とは、人間にとって根本的なこと “goodness”、“decency”、“love”、“kindness”、であると説明し、平等を求める精神と結びつく。例えば、“What remains is to give life to what is in the law: to ensure at last that as all are born equal in dignity before God, all are born equal in dignity before man”の中で、all are born equal in dignity before N の構成が反復されている。“What” から始まる一文では、法律に息吹をかけること、つまり法律を是正することが提言されている。ニクソンは、神や人の元での平等を確保することを目指しており、その平等に関する視点は、前文の “This means black and white together, as one nation, not two” にも内蔵されている。その背景で、ニクソンは最終目標を明確に掲げる。具体的には、“Let us take as our goal: where peace is unknown, make it welcome; where peace is fragile, make it strong; where peace is temporary, make it permanent”の中で、where N is V, make it A という平行法を駆使し、戦争がない世界を目指しながらその目標に進んでいくことを、旅のメタファー (“To go forward at all is to go forward together”) と平行法 (“go forward”の反復) を融合させることで、共に国民と目標へ突き進んで行くことを明言している。

ウォーターゲート事件をきっかけに辞任したニクソンの後釜であるジェラルド・R・フォードの演説では、彼の思想が明確には表れてはいない。むしろ、国民が大統領として受け入れてくれるのだろうか、という不安が際立つ。例えば、“I am acutely aware that you have not elected me as your President by your ballot”と述べて、投票によって選出されたわけではないことを自ら認めると同時に、演説自体も、“Not an inaugural address, not a fireside chat, not a campaign speech—just a little straight talk among friends.”(「就任演説ではなく、炉辺談話でもなく、選挙演説でもない」) とし、断定的な言い方を避ける姿勢が観察される。これは、not N が文頭に 3 回連続して使用されているため、

³ 漸層法とは語や観念を段階的に高めて強めたり、あるいは逆に段階的に低めて弱めたりする文彩である (野内, 2003: 160)。

三つ組表現法 (triad) (堀 2019: 70) に含まれるが、疑惑法 ⁴(aporia) の一種であると考えられ、フーオードの慎重な態度が表れている。

ジミー・カーターの演説では、「人権の尊重」がテーマとして一貫しており、演説の冒頭部分では、“This inauguration ceremony marks a new beginning, a new dedication within our Government, and a new spirit among us all” のように、a new N が 3 回繰り返され、新たな「始まり」「献身」「精神」に軸足が置かれている。A new N のコロケーション自体は、1960 年から 2021 年の演説で 35 例あり、特異な表現ではないが、“a new beginning”、“a new dedication”、“a new sprit” の組み合わせを用いているのは、カーターのみであるという点で、オリジナリティを含む表現法である。

この組み合わせがどのようにイデオロギーと関連しているのか。それは、“We are a purely idealistic Nation, but let no one confuse our idealism with weakness. Because we are free we can never be indifferent to the fate of freedom elsewhere. Our moral sense dictates a clear-cut preference for these societies which share with us an abiding respect for individual human rights” の中に見出せる。はじめの 1 文で、“idealistic” と “idealism”、“free” と “freedom” の変奏 ⁵(polyptoton) が使用され、「私たちと同じように道徳的感覚が個人の人権を尊重している社会に対して明確に優先順位を決定づける」ことを明示している。

2.3 1980 年代

レーガンの演説は、当時の経済状況を病気に見立てる比喩表現 (“the economic ills”、“economic affliction”) により、税金のシステムの問題点を指摘した上で大きな政府を批判する。例えば、“All of us need to be reminded that the Federal Government did not create the States; the States created the Federal Government” では、A (the Federal Government) ・ B (the States) が B (the States) ・ A (the Federal Government) の形で用いられ、大統領は連邦政府ではなく州レベルの統治力を重視していると判断できる。

その後、英雄メタファー (“Those who say that we’re in a time when there are not heroes”、“You can see heroes every day” など) を通して個人の尊重を訴える構造となっている。レーガンは、英雄を一般の国民として示し、国民は大きな夢を志すべきである、という趣旨 (“we’re too great a nation to limit ourselves to small dreams”) を主張する。その上で、“I do not believe in a fate that will fall on us no matter what we do. I do believe in a fate that will fall on us if we do nothing” のように “a fate that will fall on us” の形を平行法として用い、経済の悪化と政府の拡大による個人の自由の喪失を懸念しているのである。それゆえ、この文脈を鑑みると“fate” とは、衰退のこと指しており、その末路を避けるための意識的な行動を呼びかけながら、保守主義の思想が貫かれている。

ジョージ・H・W・ブッシュは、米国の基準に照らし合わせた「自由」に焦点を当て、戦争の正当性を匂わせる。米国は 1989 年にパナマを侵攻し、ノルエガ大統領を麻薬取引などの不正を行っているとして逮捕するが、その前触れとも言えるレトリックが就任演説の後半部分でドラッグをバクテリアに喩える病気のメタファー (“a deadly bacteria”) によって伝達されている。具体的には、“The most obvious now is drugs. And when that first cocaine was smuggled in on a ship, it may as well have been a deadly bacteria, so much has it hurt the body, the soul of our country” と述べ、米国の魂をも傷つけていることを示唆し、一種のプロバガンダとして機能していると考えられる。その所論に至るまでに、風のメタファー、平行法、直喩によって「自由」が前景化されている。例えば、“For a new breeze is blowing, and a world refreshed by freedom seems reborn” と “A new breeze is blowing, and a nation refreshed by freedom stands ready to push on” では風のメタファーと平行法が組み合わさっている。この平行法は、連続して用いられているわけではないが、前者が使用された後、しばらくして後者が姿を現す。A new breeze is blowing, and a N refreshed by freedom の構成が反復されることで、風のメタファーと “freedom” を共起させて「自由」に主眼を置いている。

この点において、“freedom” を際立たせる構成の繰り返しは “We know what works: Freedom

⁴ 話し手・書き手が当惑、優柔不断、慎重さなど何らかの理由で語の選択、行動の選択、事象の解釈で決断を下せずためらいを示すこと (野内, 2003: 99)。

⁵ ある語を繰り返す時、同じ root (語根) をもつ語を繰り返すもの (大山, 1957: 81)。

works. We know what's right: Freedom is right” のように、We know what V: freedom V の形態にも表面化している。1 つ目の形は、We know what V: freedom V であるが、2 つ目ではその基本形を応用し、We know what V N: freedom V N を作り出している。いずれにせよ、大統領はコロンの直前と直後の形式 (what X: freedom X) を揃えることで、固定の “freedom” を中心軸において周りのスロットを埋め、その重大さを浮き彫りにしている。後半部分では、自由を風に見立てる直喩 “freedom is like a beautiful kite that can go higher and higher with the breeze” で締め括られ、「自由」のイメージ作りに貢献していると言えよう。このように、「自由」をあえて明確に定義せずに、メタファー、直喩、平行法によってその良いイメージを作り上げ、他国への軍事介入の妥当性を暗示している。

2.4 1990 年代

クリントンの演説は、「米国の更新」をテーマにし、経済の回復と民主主義の重大さを論じている。経済状況に関しては、“we inherit an economy that is still the world's strongest but is weakened by business failures, stagnant wages, increasing inequality, and deep divisions among our own people” と説明し、当時の米国の経済状況を「世界で最も強い」と自負しながらも、そのマイナス面についても認識している。テーマである「更新」は、経済回復も含みながら、米国の民主主義がその原動力であることを示唆している。例えば、クリントンは「米国の更新」を乗り物として捉え、民主主義をエンジンと見なすメタファー (“Our democracy must be not only the envy of the world but the engine of our own renewal”) を使っている。また、米国が抱える問題の原因として、放浪のメタファーと変奏 (polyptoton) のレトリック (“we have drifted. And that drifting has eroded our resources, fractured our economy, and shaken our confidence”) を混ぜ合わせることで、これまでの政府のやり方を間接的に非難していると読めよう。

それを背景として、どのように米国を「更新」するのが、“To renew America, we must be bold”、“To renew America, we must revitalize our democracy”、“To renew America, we must meet challenges abroad as well as at home” という平行法 (To renew America, we must V の構成の反復) によって伝達されている。つまり、「大胆であること」「民主主義の活性化」「国内外での挑戦」が所論として掲げられている。また、主題となる「民主主義の活性化」に関連する思想は、国家を家族と見立てるメタファー “We must provide for our Nation the way a family provides for its children” にも見られ、国民を子供として国家が親の役割を担う考え (Lakoff, 2002) が見受けられる。レーガンの演説で見られた大きな政府を批判する態度と正反対のイデオロギーが認められる。

ジョージ・W・ブッシュの演説では、“civility” (礼儀正しさ) をテーマにしている。その証拠に全 10 件の演説の中で “civility” は計 5 回 (J F K (1 例)、ジョージ・W・ブッシュ (4 例)) であり、ブッシュがほぼ独占していることに加え、変奏と平行法によっても表面化している。例えば、“America, at its best, matches a commitment to principle with a concern for civility. A civil society demands from each of us good will and respect, fair dealing and forgiveness” の中では、“civility” が “civil” に置き換えられ、「善意と尊敬、公正な取引、許し」を市民社会は求めることが示されている。加えて、“America, at its best” の構成は演説で散りばめられており、“America, at its best, is also courageous”、“America, at its best, is compassionate”、“America, at its best, is a place where personal responsibility is valued and expected” の中で米国の最善の状態がどのようなものを明確にしている。彼の考えでは、「礼儀正しさ」「勇気」「思いやり」「個人の責任の重要性」に重点を置き、それぞれの要素が尊重される社会が米国にとって最良であることを顕示している。

そしてその土台となるのが、自由と民主主義であることを、嵐のメタファー (“America's faith in freedom and democracy was a rock in a raging sea. Now it is a seed upon the wind, taking root in many nations”) によって提示している。ここでは、自由と民主主義が一つ概念として捉えられていて、それが荒れる海の岩であったこと、つまりどのような状況でも動くことのない確固たる信念であることを示している。だが、後半部分を注意深く観察すると、“a seed” とは、自由と民主主義のことであり、“taking root in many nations” はその思想が他国で根を張っていることを示している。換言すると、この植物のメタファーによって、「米国の思想を世界に広げていく」という帝国主義的なイデオロギーが影を潜めていることは否めない。

2.5 2000 年代

米国歴史上初の黒人大統領は、米国が直面する戦争、憎悪、経済の悪化、貧困、地球温暖化の問題について言及し、米国が危機的な状況下にいることを提示することから演説は始まる。その流れでアメリカ建国以来、先人たち、それも名も無い人々が、今日の米国を作り上げるために払った犠牲や努力に対する感謝の気持ちを旅のメタファー (“journey”は3回、“travel”は2回) によって体现し、さらに 同一語句反復⁶ (anaphora) によって先人の成し遂げたことの偉大さを再認識している。その反復のレトリック (“For us, they packed up their few worldly possessions and traveled across oceans in search of a new life. For us, they toiled in sweatshops and settled the West; endured the lash of the whip and plowed the hard earth. For us, they fought and died, in places like Concord and Gettysburg; Normandy and Khe Sanh”⁷) の中で、For us, they V が3回連続して用いられ、「私たちが今日あるのは先人のおかげだ。先人たちが私たちのために力を尽くしてくれたのだ。だから、私たちは先人たちの生き方とその精神を遺産として継承し、未来につなげていかなければならない。旅を続けていかなければならない。」という、オバマの演説全体を貫く主張の論理の形成に寄与している。さらにオバマは “Our workers are no less productive than when this crisis began. Our minds are no less inventive, our goods and services no less needed than they were last week or last month or last year. Our capacity remains undiminished. But our time of standing pat, of protecting narrow interests and putting off unpleasant decisions” のように、our N と no less を反復と緩叙法⁸ (litotes) を駆使して伝達すべき事柄を前景化させている。ここでは、「米国国民には力がある」ことを伝えながらも、直面している危機に立ち向かうために、「先人たちの努力と犠牲」に敬意を示すオバマの謙虚な思想が現れている。

一方で、トランプは、先人たちの精神や生き方の継承ということは一切考えておらず、“But that is the past. And now we are looking only to the future” というドナルド・トランプの言葉は、継承どころか、過去との決別、自分たちを過去と完全に切り離している。さらにこれに続く “From this day forward, a new vision will govern our land. From this day forward, it’s going to be only America First” という “From this day forward” の反復には、アメリカのこれまでの価値観、世界の中で果たしてきたアメリカの役割を切り捨てて、これからはアメリカ第一主義で危機を切り抜けるのだという、演説全体を貫くトランプの主張を強く訴える働きがある。大統領が語りかける対象も、これまでの大統領と大きく異なる。トランプは、“We will bring back our jobs. We will bring back our borders. We will bring back our wealth. And we will bring back our dreams” のように、We will bring back our N を4回連続して使用しており、N の部分を前景化させている。すなわち、「仕事」、「国境」、「富」、「夢」を取り戻すことを力説している。また、この文脈での “our” とは米国人 (特にラストベルトの白人中産階級) を指しており、仕事などを奪っているのは移民であることを間接的に批難している。白人中産階級の人への呼びかけは、“your voice, your hopes, and your dreams, will define our American destiny” の your N の構成の代名詞の三つ組表現法の中にも見出すことができ、米国を統一ではなく、分裂する思想が表面化している。

2021年1月20日に就任したバイデンの課題は、トランプによって分断が加速された米国社会をどう変革するのか、また、感染拡大する COVID-19 にどう打ち勝つかということである。バイデンは「民主主義」と「統一」のテーマを掲げて、国民の感情に訴えかける。演説演説の冒頭では、“This is America’s day” と “This is democracy’s day” の平行法、This is N’s day の繰り返し、米国と民主主義を結びつける構図となっている。加えて、“Much to do, much to heal, much to restore, much to build and much to gain” という much to V の平行法を5回繰り返すことで、問題を多く抱える米国の逼迫した状況が前景化されている。バイデンにとってその問題を解決する糸口は、「統一」であるが、それを前提とする一貫したメタファーも駆使されている。演説を貫くメタファーは、物語メタファー (“American story”) であり、米国の「統一」への歩みが物語として認識されている。そのメタファーと「統一」の結びつきは、“But the American story depends not on any one of us, not some of us, but on all of us” の N of us の平行法によって表されている。これにより、アメリカ物語

⁶ 同じ言葉や、phrase で各 clause を初めるもの (大山, 1956: 71)。

⁷ Concord (独立戦争)、Gettysburg (南北戦争)、Normandy (第二次世界大戦)、Khe Sanh (ベトナム戦争)。

⁸ この語は、否定を重ねる表現の他に、文字通りの意味での緩叙 (すなわち、度合いの点で抑制された表現、言い換えれば「小さな」表現) を意味する。(佐藤 et al., 2006: 397)。

は国民全員の物語であることに軸足が置かれ、演説のテーマが効果的に伝達されている。アメリカ国民全員を巻き込むレトリックは、“I will be a President for all Americans. All Americans.”の“All Americans”の反復や、“We must set aside politics and finally face this pandemic as one nation, one nation”の“one nation”の反復によっても如実に体现されている。

バイデンは、自分の強い感情と意思を“My whole soul is in it today, on this January day. My whole soul is in this. Bringing America together, uniting our people, uniting our nation.”の中で、My whole soul is in N と uniting our N の平行法によって表明している。これからの4年間で「統一」に向けて全身全霊で取り組む姿勢が顕著に観察され、uniting our N の平行法からもその意味が強められている。この平行法は、大統領自身の意思であるが、「統一」に向けて国民が意識的に行うべきことを、“Let's begin to listen to one another again, hear one another, see one another. Show respect to one another.”の中で示唆している。具体的には、V one another の平行法の反復によって、互いの意見を聞くことや相手への尊重を呼びかけている。バイデンの就任演説では、政治とは「統一」へと結びつくものであり、国民の一致団結を最優先としている。

結語

本稿は、1960年から2021年の1期目の米国大統領の就任演説で、平行法(parallelism)によってどのような大統領の思惑や事態が前景化され、それによってどのような効果が生み出されているのかをAntConcのデータ並びに手作業で抽出した反復のレトリックを考察した。結論として、平行法というレトリックによって大統領の独自のコロケーションが反復されることで、その流れの中に意識が生まれ、新たなゲシュタルトが形成されるのである。多くの場合、メタファーとの関連で反復の技法が使用されており、その融合により、演説に一貫するイデオロギーがコロケーションとして繰り返される傾向がある。今後は、その他の反復のレトリックを包括的に分析し、レトリックと認知、ひいては大統領のイデオロギーの解明に迫り「言葉の選択」が、いかにして社会を形成する手段として関与しているのかを考察することが課題である。

謝辞

本稿執筆に際し、渡辺秀樹先生、大森文子先生には建設的で有益なご助言を数多くいただいた。深く感謝申し上げたい。なお、本稿に残る不備は全て筆者による。

参考文献

- Cavari, Amnon. 2017. *The Party Politics of Presidential Rhetoric*. Cambridge.
- Charteris-Black, Jonathan. 2004. *Corpus approaches to critical metaphor analysis*. Springer.
- Charteris-Black, Jonathan. 2005. *Politicians and rhetoric: The persuasive power of metaphor*. Springer.
- Charteris-Black, Jonathan. 2014. *Analysing political speeches*. Macmillan International Higher Education.
- Gibbons, Alison and Sara Whiteley. 2018. *Contemporary Stylistics: Language, Cognition, Interpretation*. Edinburgh University Press.
- Lakoff, George. 2002. *Moral Politics*. The University of Chicago Press.
- Lakoff, George. 2006. *The political mind: A cognitive scientist's guide to your brain and its politics*. Penguin.
- Lakoff, George. 2014. *Don't think of an elephant!: Know your values and frame the debate : the essential guide for progressives*. Chelsea Green Publishing.
- Silva Rhetoricae: The forest of rhetoric. (n.d.). Retrieved from <http://rhetoric.byu.edu>
- 大山敏子. 1956. 『英語修辞法』, 篠崎書林.
- 亀井俊介・杉山直子・荒木純子・渡邊真由美. 2018. 『アメリカ文化年表: 文化・歴史・政治・経済』, 南雲堂.
- 佐藤信夫・佐々木健一・松尾大. 2006. 『レトリック事典』, 大修館書店.
- DK 社編. 2017. 『歴代アメリカ大統領百科』(大間知知子訳), 原書房.
- 野内良三. 2003. 『レトリック辞典』, 国書刊行会.
- 長谷川潔. 2008. 『ケネディ大統領演説集』, 南雲堂.
- 堀正広. 2019. 『はじめての英語文体論』, 大修館書店

付録

表2 平行法 (その他のレトリック) と前景化される事柄、歴史的背景

大統領	平行法とその他のレトリック	前景化される事柄	主な歴史的背景 (『アメリカ文化年表』と『歴代アメリカ大統領百科』より抜粋)
John Fitzgerald Kennedy (1961 年 1 月 20 日就任)	• V-ing N as well as N の反復 • 動物/ 戦争メタファー • 交互配列 • 漸層法	反共主義の考えを強調/ 国民の力を重視	1961 年 3 月 1 日ケネディ、行政命令で発展途上国に協力することを目的とした平和部隊 Peace Corps 設置。 1961 年 3 月 6 日政府と関係のある業者に対して、求職者と従業員を人種・性別で差別してはならないという大統領命令が出る。(アフターマティブアクションの始まり) 1961 年 4 月 17 日亡命キューバ人で構成した反カストロ軍、CIA の支援を受けたビッグス湾上陸侵攻に失敗。 1963 年 6 月、公民権に関する演説を行い、後にリンドン・B・ジョンソン大統領によって成立する公民憲法案を提出。 1963 年 7 月、ソ連と核実験停止条約を調印する。 1963 年 11 月、46 歳の若さで暗殺される。
Lyndon Baines Johnson (1963 年 11 月 22 日就任)	• always V-ing/ re-V old N の反復 • 傷/ 火のメタファー	「偉大な社会」を強調/ 人種差別の撤廃を求める	1964 年 公民権法に署名する。 経済機会法に署名し、「貧困との戦い」を開始。 1965 年 7 月 28 日、米軍のベトナム派遣を許可。米軍の兵力は急速に増加し、1966 年までに 40 万人に達する。 1965 年 7 月 30 日、低所得者と高齢者に病院と医療保険を提供する公的医療保険制度を成立させる。
Richard Milhous Nixon (1969 年 1 月 20 日就任)	• all are born equal in dignity before N/ Where N is V, make it A の構成が反復 • 旅/ 建物のメタファー	「平等」に焦点	1970 年 公害の監視と抑制のために環境保護局を設立する。 1971 年 インフレ抑制のために 90 日間給与と物価を凍結する。 1972 年 2 月、外交関係を結ぶために中国を訪問する。 1972 年 5 月、ソ連との間で両国が保有できる核ミサイルの数を制限する戦略兵器制限交渉 (SALT) をまとめ、条約に調印する。 1974 年 ウォーターゲート事件により辞任。
Gerald Rudolph Ford (1974 年 8 月 9 日就任)	• not N が文頭に 3 回連続して使用 • 三つ組表現法 • 疑惑法	守りのレトリックとして機能	1973 年 副大統領のスパイロ・T・アグニューが脱税を告発されて辞任した後を受けて、副大統領に就任する。 1974 年 ニクソン前大統領に恩赦を与える。 1974 年 財政問題について大統領に助言を与える経済製作委員会を設置する。 1975 年 2 度の暗殺の企てから逃れる。
James Earl Carter (1977 年 1 月 20 日就任)	• a new N の反復 • 変奏	「人権の尊重」をテーマとし、新たな「始まり」「献身」「精神」を重視	1977 年 パナマ運河条約を締結し、運河地帯と運河の管理運営権のパナマへの返還に同意する。 1978 年 エネルギー危機に対処するため、国産の石油と天然ガスの価格規制を解除するが、消費者は大幅な価格の上昇に直面する。 1979 年 ソ連との間に第二次戦略兵器制限条約 (SALT II) を締結するが、ソ連のアフガニスタン侵攻により批准が見送られる。 2002 年 国際紛争の解決、特にキャンプデーヴィッド合意に果たした役割を評価され、ノーベル平和章を受賞する。
Ronald Wilson Reagan (1981 年 1 月 20 日)	• “a fate that will fall on us” の反復 • 英雄メタファー • 交互配列	国民に意識的な行動の呼びかけ/ 保守主義の思想	1981 年 サンドラ・デイ・オコンナーを女性初の最高裁判官に任命する。 1984 年 民主党候補に 20 世紀で 2 番目の大差をつけて大統領に再選される。 1985 年 増加する財政赤字を抑制するために、グラム・ラドマン・ホリングス法に署名する。

George Herbert Walker Bush (1989 年 1 月 20 日就任)	・ A new breeze is blowing, and a N refreshed by freedom/ We know what V: freedom V の反復 ・ 病氣/ 風のメタファー ・ 直喩	「自由」が前景化されている (その中身については実態がない)	1989 年 麻薬の不正取引にかかわった疑いのあるパナマの独裁者ノリエガ将軍を逮捕するため、米軍をパナマに侵攻させる。 1990 年 雇用主が障害を理由に差別することを禁止したアメリカ障害者法に署名する。 1990 年 クウェートからイラク軍を排除するために米軍を派遣する。
William Jefferson Clinton (1993 年 1 月 20 日就任)	・ To renew America, we must V の反復 ・ 家族/ 乗り物/ エンジン / 放浪のメタファー ・ 変奏	「米国の更新」がテーマとし、経済回復と民主主義を重視	1978 年 アーカンソー州知事に選出される。 1994 年 国際貿易を促進するための関税貿易一般協定 (GATT) を成立させる協定に署名する。 1995 年 予算の均衡をめぐる、共和党が多数を占める議会と衝突。連邦政府は一時的な機能停止に陥る。 1995 年 北アイルランドを訪問し、のちに結ばれる歴史的なベルファルト合意に重要な役割を果たす。ベルファルト合意によって、ふたつの政治団体の間の 30 年間続いた争いが終結する。 1998 年 ホワイトハウスで働く女性インターンとの情事に関する嘘を咎められ、弾劾裁判にかけられる。弾劾は否決。
George Walker Bush (2001 年 1 月 20 日就任)	・ “America, at its best” の反復 ・ 嵐/ 植物のメタファー ・ 変奏	米国の最高の状態を定義し、自由と民主主義を一つの概念として捉える	2001 年 3 月、地球温暖化防止のために参加国に温暖化ガス排出削減を求める京都議定書に批准しないことを表明する。 2001 年 5 月、総額 1 兆 3500 億ドルの減税を認める法案に署名する。その結果、政府の財政赤字が増加する。 2001 年 10 月、政府当局が情報収集する権限を拡大する愛国者法に署名する。 2001 年 10 月、アフガニスタンで軍事行動を開始する。 2002 年 新しい学力テストを導入し、学校が生徒の学力向上に責任を負う、いわゆる「落ちこぼれゼロ法」を成立。
Barack Hussein Obama (2009 年 1 月 20 日就任)	・ our N と no less 反復/ 緩叙法 ・ 旅のメタファー ・ 同一語句反復 ・ 緩叙法	先人の偉業を称え、米国国民の力を重視	2009 年 国際的金融危機からアメリカ経済を回復させるため、アメリカ復興・再投資法に署名する。 2011 年 5 月、パキスタンのアボッターバードで、テロ組織の指導者ウサーマ・ビン・ラーディンをアメリカ海軍特殊部隊が殺害したと発表する。 2011 年 12 月、米軍のイラクからの撤退を終了する。 2014 年 イラク国内の IS 支配地域に対する空爆を命じる。 2015 年 アフガニスタンにおよそ 5000 人の米軍を駐留させると発表する。
Donald John Trump (2017 年 1 月 20 日就任)	・ We will bring back our N/ N V—but SV (not) の反復 ・ 三つ組表現法	「アメリカ第一主義」に基づき「白人中産階級」に向けてのメッセージ	2000 年 2000 年の大統領選挙に改革党から出馬するために候補者指名を争うが、のちに指名争いから撤退する。 2016 年 大統領選挙の共和党候補に指名される。
Joe Biden (2021 年 1 月 20 日就任)	・ This is N's day/ Much to V/ N of us/ My whole soul is in N/ uniting our N/ V one another ・ 物語のメタファー	「民主主義」と「統一」がテーマ	2021 年 1 月 6 日にトランプ支持者の極右等がホワイトハウスを襲撃。分断の加速。 * COVID-19 の感染拡大継続。